

病棟看護師を対象とした 放射線治療の“体験型”勉強会の報告

千葉みゆき[†]

IRYO Vol. 73 No. 5 (269–272) 2019

要旨

放射線治療の多くは、放射線治療室の中でのみ行われるという特徴がある。そのため、病棟看護師は治療の実際がみえにくく、患者がどのように治療を受けているか、多職種が治療室で患者にどのようにかかわっているかを理解しがたいとされている¹⁾。また、看護師教育でリーダーシップをとることが多い認定看護師のうち、がん放射線療法看護認定看護師は全国で254名と少ない。このことから、放射線治療に関する看護師教育は推進されにくい状況が推察される。国立国際医療研究センター病院（当院）では、年間436例（平成29年度）の放射線治療が実施されているが、がん放射線療法看護認定看護師は不在で、病棟看護師が治療の送迎だけを行い治療場面をみていないという課題を抱えていた。そこで、がん看護専門看護師である筆者は、病棟看護師が患者の治療体験への理解を深めることを目的に、診療放射線技師の協力を得て、平成26–29年度に計5回の体験型勉強会を実施した。本報告は、受講者アンケートの結果から、病棟看護師を対象とした放射線治療の体験型勉強会の有用性を評価したものである。

勉強会後のアンケートにおいて、当院で新人教育を担う中堅以上の看護師も、体験型勉強会を通して、患者がどのように治療を受けているか理解できたと回答していた。また、患者の治療体験が理解できたことで、患者への説明や声掛けが変わるという意見が聞かれ、技師の役割に関心をもった受講者もいた。以上のことから、病棟看護師を対象とした放射線治療の体験型勉強会は、病棟看護師が患者の治療体験を理解するのに有用であり、放射線治療を受ける患者のケアや多職種連携を充実させる可能性が示された。

キーワード 放射線治療, 看護師教育, 体験型勉強会

背景

放射線治療の多くは、放射線治療室の中でのみ行われるという特徴がある。そのため、病棟看護師は治療の実際がみえにくく、患者がどのように治療を受けているか、多職種が治療室で患者にどのように

かかわっているかを理解しがたいとされている¹⁾。また、日本看護協会が認定しているがん放射線療法看護認定看護師の数は、平成29年8月現在で254名と、がん化学療法看護1,530名、緩和ケア2,211名に比べて圧倒的に少ない(日本看護協会ホームページ, <http://nintei.nurse.or.jp/nursing/qualification/cn>)。

国立国際医療研究センター病院 看護部 [†]看護師

著者連絡先：千葉みゆき 国立国際医療研究センター病院 看護部 〒162-8655 東京都新宿区戸山1丁目21-1

e-mail : mchiba@hosp.ncgm.go.jp

(2018年5月25日受付, 2019年1月18日受理)

Experience Based Seminar for Ward Nurses : Radiation Therapy

Miyuki Chiba, Department of Nursing, National Center for Global Health and Medicine

(Received May 25, 2018, Accepted Jan.18, 2019)

Key Word : radiation therapy, nurse education, experience based seminar

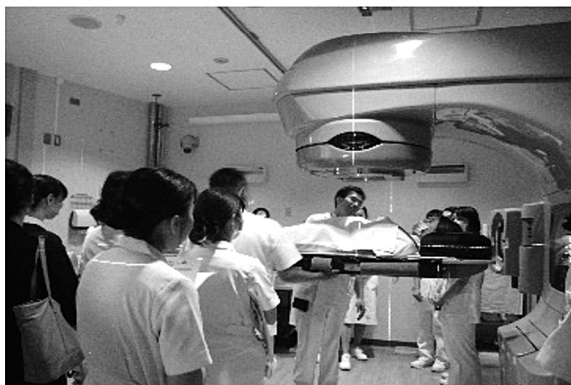
院内看護師の教育では、認定看護師がリーダーシップをとることも多く、放射線療法看護に関する病院看護師の教育は、化学療法、緩和ケアなどと比べて実施しにくい状況であると推察される。しかしながら、日本放射線腫瘍学会が平成24年に実施した調査では、放射線治療を受ける患者は増加傾向にあり(日本放射線腫瘍学会ホームページ, https://www.jastro.or.jp/medicalpersonnel/juniordoc/JASTRO_A4PDF0217.pdf)、放射線治療に関する看護師教育は重要性を増している。

国立国際医療研究センター病院(当院)は、病床数781床、7:1入院基本料を算定する特定機能病院である。平成29年4月に地域がん診療連携拠点病院に認定され、年間436例(平成29年度)の放射線治療が行われている。しかしながら、当院でも、看護師は治療の送迎だけを行い治療場面をみていないという現状があった。また、認定看護師、専門看護師により化学療法、緩和ケア、精神的ケアに関する看護師向け勉強会が年間30回ほど実施される中、がん放射線療法看護認定看護師は不在で、放射線治療に関する勉強会は行われていなかった。そこで、がん看護専門看護師である筆者は、病棟看護師が患者の治療体験への理解を深めることを目的に、診療放射線技師の協力を得て、放射線治療室の見学をメインにした体験型の勉強会を企画した。平成26-29年度に計5回の勉強会を実施し、受講者アンケートの結果から体験型勉強会が有用と考えられたため報告する。

学物理士に依頼し、司会ががん看護専門看護師が務めた。講義内容は、放射線治療の原理、リニアック(放射線治療装置)の構造、治療計画の立案、主な有害反応、受付から治療の流れなどである。放射線治療室見学は、患者体験とリニアックの照射精度を知るためのデモンストレーションを実施した。患者体験では、受講者は頭頸部固定具(シエル)やその他固定具に触れ、作り方や使用方法などの説明を受けた。また、受講者が模擬患者となり、位置合わせ、機械動作を見学した(図1)。その中で講師は、治療中に技師が気を付けている転倒転落予防や、看護師に留意してほしい患者搬送方法や点滴ルート長さなどについて説明した。リニアック照射精度デモでは、医学物理士が治療計画装置で立案した照射プランを用いて、リニアックによる照射が実際に行われた。ここでは、リニアックから照射されるX線でフィルムにモノリザが描かれ、精密な照射が可能であることが説明された(図2)。この間、受講者は自由に質問できた。毎回、数名の診療放射線技師と放射線治療棟看護師から受講者の対応に協力が得られ、勉強会の最後に、協力が得られた治療室スタッフを受講者に紹介した。毎回の勉強会の後、勉強会を評価する目的で受講者にアンケート調査を実施した。本報告では、3年分のアンケートの集計結果をもとに、勉強会の有用性について放射線治療室スタッフとともに評価した。倫理的配慮として、アンケートへの回答は任意とし、無記名にして個人が特定されないようにした。

方 法

勉強会の開催時間は18-19時の1時間で、構成は講義20分、放射線治療室見学40分とした。講師は医



結 果

1回の勉強会の受講者数は7-32名で、3年間でのべ79名の看護師が勉強会に参加した。看護師の経



図1 体験型勉強会の様子



図2 リニアック照射デモで示したモナリザ

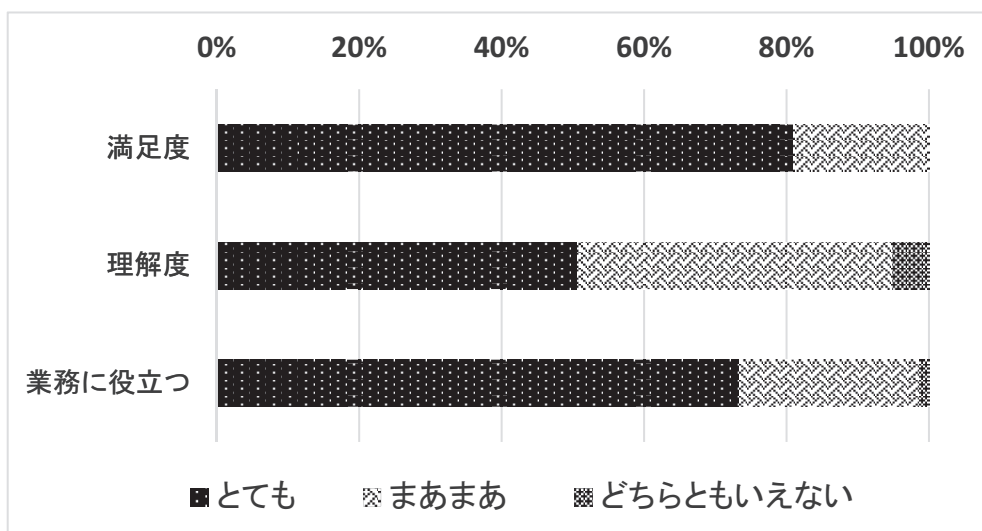


図3 体験型勉強会の満足度，理解度，業務における有用性 (n=79)

「あまり」「まったく」と回答した者はいなかった

験年数は、1-3年目が43名、4年目以上が36名だった。勉強会後のアンケートでは、勉強会の満足度、理解度、有用性について、「とても」-「まったく」の5段階リッカート尺度で質問した。95%以上の受講者が、勉強会に満足した、内容が理解できた、業務に役立つと回答し、「あまり」「まったく」と回答した者はいなかった(図4)。アンケートの自由記載を経験年数別に表1に示した。アンケート結果をもとにした放射線治療室スタッフとの評価では、技師から「看護師さんがこんなにたくさん治療室に来てくれたことがまず嬉しい」「移動を手伝ったり、みていていいですか?と声を掛けてくれる看護師さ

んが増えた」という意見が聞かれた。

考 察

本体験型勉強会は、放射線治療の治療場面をみることの少ない病棟看護師が、患者の治療体験への理解を深めることを目的に開催された。勉強会後に受講者に実施したアンケートでは、勉強会の満足度、理解度、業務における有用性はいずれも高く、受講者にとって意義のある勉強会だったと考えられる。

アンケートの自由記載では、1-3年目の経験の浅い看護師だけではなく、当院で新人教育を担う4

表1 勉強会アンケートの自由記載

1-3年目 (43名)	4年目以上 (36名)
イメージがたった (2)	イメージがたった (3)
わかりやすかった (4)	わかりやすかった (2)
見学、体験できて勉強になった (5)	見学、体験できて勉強になった (3)
楽しかった	楽しかった (3)
患者さんへの声掛けが変わる	何も知らずにケアしていて患者に申し訳ないと思った
患者さんとのかかわりがしやすくなる	患者の思いを知ることができた
	今後は患者に説明できる
	患者さんの不安な気持ちがわかったので、なるべく早く迎えに来て労いの言葉を掛けたい
	患者さんと放射線治療の話をもっとしようと思った
	技師さんの仕事が垣間見れてよかった

年目以上の中堅看護師も、体験型勉強会により患者がどのように治療を受けているかが理解できたと回答していた。このことから、従来の指摘どおり、病棟看護師が日々の業務を通して患者の治療体験を理解することは難しい現状と推察された。そのような中で、体験型の勉強会は、病棟看護師が患者の治療体験への理解を深めるのに有用であることが示唆された。

アンケートの結果は、体験型勉強会の有用性は、患者の治療体験の理解にとどまらないことを示している。治療の実際が理解できたことで、患者への説明や声掛けが変化するという回答があった。このことは、患者の治療体験の理解がケアの変化に繋がることを示唆しており、体験型勉強会によりケアが充実する可能性もある。また、技師の役割に関心をもった受講者や、治療の送迎時に自分から技師に声を掛ける看護師もみられるようになった。勉強会で技師と直接やり取りしたことにより顔のみえる関係性が構築され、コミュニケーションがとりやすくなった

影響が考えられる。このことは、技師など放射線治療室スタッフの協力を得て実施した勉強会が、多職種連携を促進する可能性を示唆している。

結 語

病棟看護師を対象とした放射線治療の体験型勉強会は、患者の治療体験の理解に有用であり、放射線治療を受ける患者のケアや多職種連携を充実させる可能性が示された。今後も、放射線治療室スタッフと協働し、病棟看護師を教育してケアの質の向上に努めたい。

利益相反について：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 久米恵江, 祖父江由紀子, 土器屋卓志ほか. がん放射線療法ケアガイド. 新訂版. 東京: 中山書店; 2013.